

園のおたより



第 5 号

令和 8 年 9 月

埼玉大学教育学部附属幼稚園

夏休みを終えて

園長 大向 隆三

長かった夏休みが終わり、園内にこどもたちの元気な声が戻ってきました。始業式の日には久しぶりに登園してきたこどもたちの笑顔を見ることができ、私たち教職員一同、とても嬉しく思っています。少し日に焼けた顔で目を輝かせながら夏休みの様子を教えてくれるこどもたちの姿から、一人ひとりが充実した夏休みを過ごしてきたことが伝わってきます。夏休みのさまざまな経験は、こどもたちの心を大きく育てる貴重な時間となったことでしょう。

夏休み中には、自然に親しみ、多くの人と関わる機会があったご家庭も多かったのではないのでしょうか。普段とは違う場所で新しい発見をしたり、家族や親戚とゆっくり過ごしたりすることは、こどもたちの好奇心や思いやりの心を育みます。楽しかった思い出を友達や先生に話しながら互いにその話に耳を傾け合うことは、言葉でコミュニケーションする力を育てる大切な経験にもなります。園では、こどもたちの夏の思い出を受け止めながら、それぞれの経験をこれからの遊びや活動へとつなげていきたいと考えています。

さて、9月も中旬を過ぎてずいぶんと涼しくなり、最近では園庭に赤とんぼが遊びに来るようになりました。夜空を見上げると美しい月が輝く季節です。今年の9月の満月は27日で、これを「コーンムーン」（9月がとうもろこしの収穫期に当たるから）と呼ぶそうです。お月見は、昔から実りの秋に感謝し、美しい月を眺めながら自然の恵みに思いを寄せる日本の伝統行事です。満月を見上げたり、ススキやお団子（9月のこども会ではみたらし団子をいただきました）を飾ったりする風習には、自然を大切にし、季節の移ろいを感じる日本人の豊かな心が込められています。

こどもたちは四季の変化を五感で感じながら成長していきます。虫の声に耳を澄ませたり、秋の澄んだ風を感じたり、夜空に浮かぶ丸い月を見つけたりする何気ない体験は、豊かな感性を育む大切な機会です。ぜひご家庭でも、お子さんと一緒に夜空を見上げ、「今日はきれいなお月さまだね」と語り合うひとときを過ごしていただければと思います。

2学期は、運動会をはじめ、さまざまな行事や活動を通してこどもたちが大きく成長する学期です。一人ひとりの思いや育ちを大切にしながら、友達と力を合わせる喜びや挑戦する楽しさを味わえるよう、力を合わせて保育に取り組んでまいります。保護者の皆様には、引き続きご理解とご協力を賜りますよう、よろしくお願いいたします。



こどもの表現へのアンテナ

副園長 小谷 宜路

今年の夏から秋にかけては、全国の各地で大きな地震、台風、大雨などによる災害がありました。日本だけでなく世界各地からも、様々な自然災害のニュースが聞かれています。

今月は、2001年の同時多発テロから25年となり、改めて関連する記事を目にすることが多くありました。当時、3歳児クラスの担任をしていましたが、夜の第一報が明けた翌日、1組のある一人が、紙に黒色のクレヨンで長四角（ビル）を描き、さらに、そこに勢いをつけてクレヨンを走らせ、ぐるぐると園を描くように描き加える姿がありました。繰り返し流されるテレビのニュース映像からの刺激だったのでしょうか。周りの大人たちが醸し出す、大変なことが起きているらしいという雰囲気も含めて、その人が感じたといった何かをクレヨンにのせて吐き出していたのかも知れません。

2011年の東日本大震災からは、今年で15年となりました。3月の地震後、年度が変わって4歳児の担任として迎えた保育の中で、数人のこどもたちが、当時園庭にあったジャングルジムに登っていきました。ジャングルジムの下では、手を大きく動かしながら「いそげ！つなみがくるぞ」と、友達に呼びかけている人の姿がありました。その後もしばらく、パトロールするように、園内のいろいろなところを確かめていく一隊のごっこ遊びがありました。この遊びはこのまま続けてよいのだろうか…、難しい状況が続く中で“不謹慎”とされるのだろうか…といった迷いが本当にたくさんありました。少し時間を経た今、振り返ってみると、こどもたちは、言葉にしにくい漠とした感覚を、「遊び」の形で表していたような気がします。

幼稚園では2学期も、地震、火災、不審者対応などを想定した避難訓練の実施を計画しています。様々な災害や緊急時に備えて、可能な限りの予防策を取ったり、行動のシミュレーションをしたりしておくことは必須のこととして位置付けています。さらに、身体的な安全を守ることに加えて、心の状態をできるだけ安全に守ることも、暮らしの過程では重要になってくると思います。こどもたちから発せられる、いろいろな形の表現（表現できないことも含めて）から、その中に含まれている心の動きを捉えていく、そのような大人のアンテナを研ぎ澄ませておくことが、防災の観点からも大切なことだと、改めて感じています。



クラスだより



1 くみ

「雨の日の楽しみ」

たまの晴れ間が心地よい、秋雨の多い1か月ですが、雨の日ならではの楽しみがあります。1組の雨の日の楽しみを紹介したいと思います。

夏休みにお祭りに出かけた人が何人かいたようです。食休みの時間に、「わっしょいわっしょい」と嬉しそうに歩く姿がありました。頭には鉢巻に見立てたお面のバンド、手には太鼓のばちに見立てたチラシの棒がありました。それを見た人が、「僕もそれ見たよ」と同じように「わっしょいわっしょい」と後ろを歩きました。お祭りの楽しさは次の日にも続いていきました。積み木を組んでやぐらのようにして、そのまわりを「わっしょいわっしょい」と歩きました。「太鼓はないの？」という声から手持ちの太鼓を準備すると、「月夜のポンチャラリン」という曲に合わせて嬉しそうに叩く姿がありました。夏休み中の思い出が持ち寄られて、楽しげな様子でした。

芝生の上で開放的に体を動かすことは難しいですが、室内では、音楽に合わせて体を動かす楽しみがあります。食前の楽しみな時間の一つになっていて、「今日は音楽のやつやらないの？」と楽しみな人もいます。動物の特徴を真似たり、お祭りの遊びから、今度はみんなで盆踊りの雰囲気や輪になって踊ったりしています。自分の手足を使って表現することも面白そうですし、輪になって踊ったときには友達の姿や表情もよく見えることが嬉しそうでした。大人が考えた振り付け以外にも、曲からイメージを膨らませて、体の動きで表す人もいます。それをみんなで面白がって取り入れながら、大勢の中で体を動かすのが楽しいひと時になっています。

晴れ間に恋しさもありますが、雨だからこそできた遊びや、みんなでの楽しみがあった9月だったと感じています。変化する気候に合わせて、心地よく遊べるようこれからも支えていきたいと思っています。





2 くみ

「秋の自然との関わりの中で」

2 学期が始まり、園庭にはトンボがたくさん飛んでいたり、秋らしい気温を感じられたり、季節の移り変わりを感じながら過ごしています。

先日、カリンの木の下で黒いイモムシを見つけました。ご飯をあげたいけれども、何のイモムシか分かりません。その時、ある人がひらめき、急いで室内から『昆虫図鑑』や『イモムシ図鑑』を取ってきました。一緒に探していた人と載っているイモムシの写真の中から捕まえたイモムシが何なのか探しますが、なかなか同じイモムシが見つかりません。クラスのみんなに相談すると「家に虫の図鑑があるから見てきてあげるよ」と頼もしい一言をくれる人が出てきたり、イモムシを探していた人たちだけの困りごとをみんなで考える時間となりました。翌日、セスジスズメという種類だと分かりましたが、どれだけ探しても何を食べるかが分かりません。草やカリンの実など思いついたものを虫かごの中に入れ、毎朝、食べるかどうか見ることにしました。その姿に気付いた人が「お花も食べるんじゃない？」と考えて持ってきてくれたり、登園すると多くの人がイモムシの様子を気にかけたりするようになりました。いろいろな葉を入れてみる中で、カナメモチの葉を少し食べることに気付き、「やわらかいからかな」「赤いのがおいしいんだよ」とようやく見つかったことを喜んでいました。

少しずつ涼しさを感じるようになると虫の声が聞こえてくるようになりました。その声をたどりエンマコオロギを捕まえました。何を食べるか3組の“虫博士”の人に尋ねに行くと「野菜と小さい魚を食べるんだって」と教えてもらったことを嬉しそうに話していました。「小さい魚ってどんな魚だろう」と聞くと、近くで話を聞いていた人がぼそっと「それってメダカかな」と呟き、周りにいた人も納得した表情で、どうやって捕まえるか、本当にメダカを食べるのかの話しが盛り上がっていました。

人によっては普段、目に留まりづらいことや怖くてあまり関わってこなかったことも、友達の姿や言葉が興味のきっかけとなり、じわじわと周りに広がっていきました。友達の姿や興味、思いに目や耳を傾ける時間も大切にしながら過ごしていきたいと思います。





3 くみ

「幼稚園の暮らし」

お弁当の時に蓋を開けると目を輝かせながら「今日はたまごやきが入ってる」「ママがつくねを作ってくれたよ」と嬉しそうにしています。美味しく食べることを通して作ってくれた人とのつながりを感じるひとときです。このように「美味しい」「嬉しい」が感じられるからこそ、体が栄養と捉えて吸収したり循環したりして健康をつくっていくのではないのでしょうか。ある日、また新しい「嬉しい」があったようです。カバンの中を眺めながら目を輝かせています。そして、「やっと分かった」と話すのです。「あのね、いつもママがカバンに、お弁当とコップをきれいにに入れてくれていて、どうやってるのかなぁと思っていたの。毎日こうかな？ こうかな？ とやってみてたけど、やっとできた」と満足そうに。思い返せば、毎日カバンを眺めて首を傾げる姿がありました。こういうことだったのかと、わたしもようやく分かりました。いつも心を込めてくれていたことを受け取っていたのですね。朝と同じように丁寧に整ったカバンの中を眺めて心地よさを味わっていました。きっとおうちで、お互いに「嬉しい」を交換したことと思います。

幼稚園では、おうちの人と少しの間、離れていますが、心のつながりがある中で安心して暮らします。そのつながりの安心があるからこそ、園が友達や先生と遊ぶ嬉しい場になっていくのだと思います。倉橋惣三先生※は、『幼稚園雑草』の中でこう語っています。

※現在のお茶の水女子大学附属幼稚園の初代園長（主事）先生

幼稚園は先生と子供がいればそれで幼稚園が出来るといって、決してそうではない。それならば、先生を銘々の家庭に招いてもいいわけであるけれど、幼稚園が幼稚園でなければならぬ大きな訳は、その幼稚園に集まって来る友達ということになる。友達同士では誰が誰を遊ばせるということもなく、また誰かが誰かに満足を与えるのではなくお互いということになる。このお互いということが幼稚園の幼稚園たるもっとも特別な意味である。

安心した暮らしの中には言葉などに表せない大切なことがあります。幼稚園だからこそ経験できる大切なことを支える、目には見えない何か、どこかでつながっている大切なことを丁寧にしていきたいです。